

# 追 悼



故 大藤眞先生お別れの会で告別の辞を述べる榎野博史

## 故 大藤 眞 先生 略歴

(大正7年6月17日生—平成21年4月2日没)

大正7年6月 大藤 昇・孝美の三男として岡山市富田町  
に出生

昭和13年3月 第六高等学校卒業

昭和16年12月 岡山医科大学卒業

昭和16年12月 岡山医科大学副手(第二内科)

昭和17年5月～昭和21年5月 中・南支に転戦(陸軍軍医大尉)

昭和25年10月 医学博士

昭和28年1月 岡山大学医学部助教授(第二内科)

昭和34年7月～昭和35年8月 米国ボストン市タフト大学  
留学, 米欧各国視察出張

昭和38年～ 池田厚子様のご主治医

昭和42年11月 岡山大学医学部教授(第三内科)

昭和45年10月 日本腎臓学会入会

昭和48年11月 日本腎臓学会学術評議員就任

昭和51年7月 岡山大学医学部附属病院長 岡山大学評議員

昭和54年6月 岡山大学医学部部長 岡山大学評議員

昭和56年6月 岡山大学学長

平成元年 吉備国際大学学長

平成11年 順正短期大学学長

平成16年4月 日本腎臓学会名誉会員

昭和53年11月 第21回日本腎臓学会会長

昭和55年7月 第12回日本結合組織学会会長

昭和56年6月 第54回日本内分泌学会会長

昭和57年5月 第26回日本リウマチ学会会長

昭和57年10月 第32回日本アレルギー学会会長

### <主な研究助成金>

昭和45年 三井生命厚生事業団・成人病研究助成金

昭和45年 財団法人山陽放送・山陽放送学術文化財団  
研究助成金

昭和47年 千代田生命健康開発事業団・社会厚生事業助成金

昭和49年 日本医師会・日本医師会医学研究助成費

昭和56年 内藤記念科学振興財団・海外学者招聘助成金

### <受賞>

昭和52年 工藤学術財団・学術研究に関する優秀な研  
究に対する褒賞

昭和58年6月 日本リウマチ学会賞

昭和63年1月 山陽新聞社賞

平成2年2月 岡山県文化賞

平成6年11月 勲2等旭日重光章

平成10年9月 岡山県三木記念賞

平成17年 日本神経内分泌学会 特別功労賞

### <学会長>

昭和51年7月 第4回日本臨床免疫学会会長

## 故 大藤 眞先生を偲んで

岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科長，腎・免疫・内分泌代謝内科学教授

槇野博史

日本腎臓学会名誉会員，岡山大学元学長，岡山大学名誉教授，大藤 眞先生におかれましては，平成 21 年 4 月 2 日午前 3 時に心筋梗塞のため満 90 歳でご逝去されました。痛恨の極みにありますが，多くの面でご指導を受けた者として，ここにご冥福をお祈りしつつ，大藤先生との思い出を述べさせていただきます。

大藤先生のご指導を，私が最初に直接賜わったのは学生の 5 年生のときのポリクリ(今でいう臨床実習)でした。膠原病の一つである皮膚筋炎の患者が大藤先生の外来へ紹介されて来ました。患者を前にしてヘリオトロープ疹を説明していただいたり，打腱器で腱反射の取り方を教えていただきました。大学生や教室員に対して大変熱心にご指導をしていただきました。

大藤先生の講義は学生にとって印象的でした。講義のプリントは充実しており，それに加え，黒板の周囲には講義の病気に関する何枚もの模造紙が掲げられていました。大藤先生のご講義の「自己免疫による膠原病」のお話は大変新鮮で，私は免疫に興味を湧いてきました。私は腎臓，特に糖尿病性腎症に興味があり，腎臓の病気の多くは自己免疫現象により発症すると考え，大藤先生の主宰されている第三内科に入局させていただきました。

大藤先生の学問的なご業績の一つは，臨床免疫学を打ち立てられたことです。その当時，抗核抗体などさまざまな自己抗体の測定が可能になり，それを臨床に応用され臨床免疫学会を創設されました。SLE(全身性エリテマトーデス)の診断がやっと可能になった時代で，その当時，「大藤の SLE の診断基準」があり，第三内科の最も主要な疾患は SLE でした。ループス腎炎の合併が多く倉田典之先生，原邦夫先生，鬼無信先生が精力的に腎生検をされており，蛍光抗体法の所見によるループス腎炎の分類を発表されていました。ループス腎炎におけるステロイドパルス療法の有用性をわが国で明らかにしたのは大藤先生のご指導の賜物です。

昭和 53 年に日本腎臓学会学術総会が大藤会長のもと岡山で開催されました。私は駆け出しの頃で，太田善介名誉教授，高橋香代先生の指揮のもと腎臓班で学会のお手伝いをさせていただきました。学会当日は，免疫複合体による腎障害を明らかにしたラ・ホーヤのスクリップス研究所の FJ Dixon 先生の特別講演のスライド係を仰せつかりました。会場の岡山市民会館は当時岡山では最も広い会場でしたが，会員で溢れ，講演の後に Dixon 先生が「日本腎臓学会の会員にしては数が多過ぎる，韓国をはじめ外国からも参加したのか？」と尋ねられた言葉が印象的でした。

私が平成 14 年に ISN/RPS によるループス腎炎分類改定の国際コンセンサス会議で日本代表の委員に任命していただいたり，厚生労働省科学研究班難治性血管炎の班長を現在務めさせていただいているのも，大藤先生が打ち立てられた，当科の臨床免疫学の伝統のお陰だと，改めて感謝申し上げます。

一昨年，平成 19 年末に，第三内科は昭和 42 年に大藤先生が教室を創設されて 40 周年を迎えました。年末の同門会には奥様とご一緒に元気なお姿を拝見させていただき，同門一同，大変安堵致しておりました。開講 40 周年を記念して「三内三人集」を発刊させていただきました。大藤先生には俳句集「四季折々」

をお嬢様の信子先生に大藤先生の年齢にちなんで 89 句を選句していただき、俳句集「四季折々」を編んでいただきました。大藤先生をお偲びして最後にその中の 3 句をご紹介します。

「春雨や頭で分ける縄暖簾」

大藤先生の科学者としての観察力を示しています。

「何よりも帰国の味や豆の飯」

国際学会からお帰りになったときのものか、奥様の用意された夕食をお酒とともに召し上がって、最後に豆ご飯を満足そうに食べておられる大藤先生のお顔が浮かびます。奥様への愛情の感じられる句です。

「亡き人とフト行き交うや春朧」

今宵フト、大藤先生とお目にかかれそうな気のする句です。

大藤先生が残された多くの教えを胸に、Nephrology をはじめ医学の発展に努力することを誓います。大藤先生、どうぞ安らかにお休みください。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

平成 21 年 4 月